

株主のみなさまへ

第11期報告書

2008年4月1日～2009年3月31日

株式会社トランスジェニック 証券コード2342

生命資源【遺伝子破壊マウスと抗体】のリーディングカンパニーとして 新たな経営体制で、世界の人々の健康と豊かな社会の実現をめざします。

株主の皆様には、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
このたび、代表取締役社長に就任いたしました。
これからも引き続き、ご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

2009年6月 代表取締役社長 **山村 研一**

■ 第11期の報告書をご高覧いただくにあたりまして、まずは新社長の山村のメッセージをお届けします。

社長就任の抱負

当社設立の翌年の1999年から「遺伝子破壊マウスの効率的な作製方法—可変型遺伝子トラップ法—」の発明者として、遺伝子破壊マウス事業の立ち上げに関わり、その後 2002年からは研究開発担当取締役として経営に関わってきました。

これまで、当社は、経営理念に基づき、生命資源を軸としたビジネスを拡大するとともに、多くの経営課題・研究課題に対し役員・従業員一丸となって取り組んでまいりました。

今後も引き続き、この理念とこれまで創りあげた事業基盤を最大限に活用し、収益基盤の確立と研究開発の推進を図ります。そして医学・医療の進展に役立つ価値ある生命資源を創出すること、また当社が持続的成長を果たし企業価値を高めること、これらの期待にお応えできるよう、しっかりと舵を取ってまいります。

進化論を唱えたダーウィンが「強いものが勝つわけではない、賢いものが勝つわけではない、変化するものだけが勝つのである」という言葉を残しています。大学発バイオベンチャーとしての出自を忘れず、変革を恐れずに新しいことに挑戦することが重要だと考えます。

トランスジェニックのいま

バイオベンチャーは将来の飛躍的な成長につながる研究開発こそが生命線です。

当社は、遺伝子破壊マウスおよび抗体を開発し、製薬企業や公的研究機関の研究者に提供することで、研究開発の飛躍的な進展をサポートしています。

遺伝子破壊マウスは、ヒトの病気のモデルの作製、病気の原因と病態の解明、そして治療のための医薬品を効率的に創り出すことを可能にします。現在当社は、最先端の研究に携わられている研究者に対して、ニーズにあった遺伝子破壊マウスをオーダーメイド作製して、提供しています。

抗体は、病気の指標となる分子を検出する診断薬の開発に貢献し、早期診断・早期治療を可能にします。当社は、独自のGANP[®]マウス技術を用いて、高い親和性をもつ抗体を迅速かつ効率的に作製しています。この優れた抗体は、ごく微量の体内成分や、ウイルスなどの病原成分などを感度よく検出することが可能です。現在当社は、この技術を用いた抗体試薬の自社開発に注力しており、研究者が求める抗体試薬を数多く発売し、そのラインナップを拡充していく予定です。また、この抗体試薬の開発過程においては、診断用抗体、治療用抗体への可能性を広げる検討をしています。

このように当社は、まだ我々が克服できていない病気に対して、新たな診断方法の確立や画期的な新薬の創出に貢献することをめざしています。

そして、いま取り組む課題

——収益基盤の確立と研究開発の推進

早期に収益基盤を固めるとともに、将来の成長基盤である研究開発に経営資源を投入すること。また、当社ならではの強みを追求し新たな展開を視野に入れた検討を開始しています。

第一に、展開するビジネスについて今後の方向性を明確にしました。

遺伝子破壊マウス事業については、ES細胞操作や遺伝子解析など専門的で高度な技術を駆使してオーダーメイドで作製するため労力を要すること、作製場所の点在化という課題があり、事業として利益率が低いという問題点がありました。現在、各工程を見直し、業務の効率化をはかり、利益率の向上をめざしています。

抗体事業については、GANP[®]マウス技術という、競合他社にない先端の技術を取得しながら、依頼を受けて作製するという受託事業に活用していたため、秘密保持の関係から成功事例をアピールしづらいという状況にありました。そこで、GANP[®]マウス技術を最大限活用するために、2008年9月、受託事業から自社製品開発に軸足をシフトしました。今後、国立がんセンターをはじめとする共同研究先と存分に力を出し合い、成功事例を数多く、皆さまにご報告する予定です。

次に、全社的なコストの削減について、大胆に取り組めます。

これまで事業拠点を集約することによって一定の成果をあげてまいりました。今後は全てのコストを見直し、平成22年3月期数億円単位のコスト削減を図る予定です。

そして、新たな展開を迎えています。

また、この4月には、予防医学に貢献する食材として注目されているベビーリーフの有機栽培と販売を主力事業とする株式会社果実堂と業務提携しました。同社が持つ食品の安全性評価・機能性解析と、当社が持つ技術力と事業基盤によりシナジー効果が得られることを確信し、新たな展開に向けた取り組みを開始しています。

変化し進化を続けるトランスジェニックのこれから

——新たな事業領域へ

我が国は、医学・医療の日覚ましい進歩により、世界一の長寿国となりました。しかしながら、高齢化社会の到来とともに、生活習慣病の罹患率および死亡率は年々増加しています。また、医療費の高騰により、医療保険制度も転機を迎えています。

このような状況で「健康と豊かな暮らし」を実現するためには、病気を未然に防ぐ「予防医学」が大切であると考えます。

“医食同源”という言葉があります。日々口にする食物こそが薬の源で、予防医学にとって重要です。

今後当社は、生命資源から得られる診断薬、医薬品などの創出をめざす事業領域に加え、食品の安全性評価、機能性評価など「予防医学」に貢献する新たな事業領域への拡大を検討してまいります。

当社は、皆さまの健康を願い、皆さまの暮らしにより直結したところでお役に立ちたいと考えています。

Profile 略歴

山村 研一

KEN-ICHI YAMAMURA

1948年 10月 10日生まれ

- 1986年 4月 熊本大学医学部附属遺伝医学研究施設 教授
- 2000年 4月 熊本大学発生医学研究センター（現発生医学研究所）教授 現任
- 2002年 8月 株式会社トランスジェニック 取締役
- 2002年 11月 熊本大学 副学長
- 2009年 4月 熊本大学 理事・副学長 現任
熊本大学生命資源研究・支援センター教授 現任
株式会社トランスジェニック 代表取締役社長 現任



Contents 目次

ご挨拶	1	会社概要	7
事業と研究開発のご紹介	3	株式の状況	7
業績のご報告	5	株主メモ	7
連結財務諸表	6	IRからのお知らせ	7

経営理念

生物個体からゲノムにいたる生命資源の開発を通じて
基盤研究および医学・医療の場に遺伝情報を提供し
その未来に資するとともに
世界の人々の健康と豊かな暮らしの実現に貢献する

生命資源

尊い生命そのものである遺伝子破壊マウスと尊い生命から得られる抗体を総称し、敬意を込めて生命資源と呼んでいます。

遺伝子破壊マウス

マウスES細胞と遺伝子組換え技術を用いて創製します。遺伝子の機能解析、病気のメカニズムの解明や新薬の開発などに幅広く貢献しています。

抗体

マウスの免疫機能を利用して創製します。特定の分子と結合する性質を利用して研究用試薬として一般的に使用されているほか、診断薬・医薬品として最先端の医療に役立っています。

生命資源が切り拓くライフサイエンスの未来、 体外診断薬・医薬品の創出をめざして歩み続けています。

■次に当社の事業と研究開発についてご説明させていただきます。

拡がる事業領域

病気の原因となる遺伝子や病気が発症するメカニズム、また病気の指標となる分子についての学術論文が日々発表されています。21世紀に入り、こういった基礎研究の成果に基づいて、体外診断薬・医薬品が開発される時代を迎えています。

当社が創製する生命資源【遺伝子破壊マウスと抗体】は、このような基礎研究や創薬研究において有用であり、その重要性はますます増えています。

生命資源が活躍するフィールド①
生命現象の解明・病気のメカニズムの解明

生命資源が活躍するフィールド②
体外診断薬の開発

生命資源が活躍するフィールド③
医薬品の開発



展開するビジネス

4つの事業セグメント		
遺伝子破壊マウス事業	遺伝子破壊マウスおよび遺伝子破壊ES細胞について使用権を供与しています。また遺伝子改変マウスの作製および解析などの受託研究を展開しています。	
抗体事業	抗体を開発し、抗体試薬として製造販売するほか、診断用抗体として導出しています。「高親和性抗体作製技術-GANP [®] マウス技術-」について技術使用権を供与しています。	
試薬販売事業	ライフサイエンス研究に必要な製品群と製品情報を提供し、研究をあらゆる面からサポートしています。	
その他事業	当社の顧客が求める創薬研究支援サービスなど、周辺のビジネスを展開しています。	

研究開発プロジェクト

これら4つの事業セグメントの中でも、当社が創製した生命資源をもとに展開する遺伝子破壊マウス事業ならびに抗体事業が、主な事業です。これらにおいては、研究開発の成果を製品やサービスとして販売提供するビジネスとともに、技術ライセンスやシーズとして導出(ライセンス)するビジネスを展開しています。現在の主な収益源は販売提供ビジネスですが、これを中長期的にはライセンスビジネスによるものに転換することをめざし、ライセンスビジネスにつながる研究開発プロジェクトを複数進めています。

なかでも、現在推進しているプロジェクトは、GANP[®]マウス技術による自社抗体製品の開発です。

製薬企業が創薬ターゲットとして注目する膜タンパク質GPCRをターゲットとし、これらに対する抗体を順次開発しています。また得られた各々の抗体の評価は、国立がんセンターと連携し進めており、抗体試薬としての可能性のみならず診断用抗体としての可能性なども検討しています。

ライセンスビジネスにつながる研究開発プロジェクト一覧

研究開発	ビジネス						
	販売提供ビジネス			ライセンスビジネス			
	抗体試薬	測定キット	サービス	技術	診断薬	医薬品	
① 尿中腫瘍マーカー 特許出願				GANP			提供先の企業で事業化を検討中 うち先行する1社とライセンス契約を締結
② 膵臓がんマーカー 特許出願				GANP			国立がんセンターと共同研究を推進中
③ 胆管がんマーカー 特許出願				GANP			熊本大学と共同研究を推進中
④ 糖尿病マーカー				GANP			
⑤ がん治療用抗体				GANP			エーキューブ社と共同研究を推進中
⑥ GANPマウス技術の 技術ライセンス				GANP			提供先の企業で研究開発が進行中 うち2社とライセンス契約を締結
⑦ GANPマウス技術による 自社抗体製品開発				GANP			国立がんセンターや大学など 公的研究機関と共同研究を推進中
⑧ 遺伝子破壊マウスによる 創薬ターゲットの探索 特許出願				トラップ			製薬企業で創薬研究が進行中
⑨ 遺伝子破壊マウスによる 遺伝子機能解析 特許出願				トラップ			保有する生命資源を活用し、推進中

Topics トピックス

01 がんの克服をめざし、腫瘍マーカーについて研究開発を進行中

医学や医療が進展し、がんは早期に発見し適切な治療を行うことで死亡のリスクを軽減することができる病気となりました。トランスジェニックは、早期診断・早期治療を実現するために、あらゆる早期がんを尿で検出することをめざしています。その候補である尿中腫瘍マーカー「ジアセチルスベルミン」については、2008年7月に診断薬企業とライセンス契約を締結することができました。さらに、早期の発見が難しく、最も悪性で予後が悪いとされている「膵臓がん」については、国立がんセンターとの共同研究のもと新規膵臓がんマーカーを検出する抗体の開発に成功し、2008年10月に特許出願に至りました。このように当社は、あらゆるがんを検出する腫瘍マーカーと特定の臓器のがんを検出する腫瘍マーカーの双方をターゲットとし、研究開発を進めています。

腫瘍マーカー

がんの進行・退縮に伴い、血液や尿・組織などで増減する物質を「腫瘍マーカー」もしくは「がんマーカー」といいます。すでにこれらの一部は、診断・治療効果や病状経過の指標(マーカー)として臨床の場で利用されています。

02 株式会社果実堂に出資、業務提携

株式会社果実堂に出資し、2009年4月に同社と業務提携をしました。株式会社果実堂は、栄養価が高く、予防医学に貢献する食材として注目されているベビーリーフに着目し、これを有機JAS法遵守ならびに厳格な識別番号による徹底的なトレーサビリティを確保し提供することで、大手百貨店・大手量販店等から高い評価を受け、商品を供給しています。今後、両社の持つ技術やノウハウを統合することから得られるシナジーを追求し、食品の安全性評価と機能性解析など新たな事業領域への拡大を検討してまいります。



有機栽培ベビーリーフ ▶

基礎研究・創薬研究のニーズに応えるとともに、 着実に黒字化に向けた取り組みを進めています。

ゲノム科学やたんぱく質科学を応用したライフサイエンス研究の目覚ましい進歩によって、分子標的薬・抗体医薬そしてバイオマーカーなどの創出につながる研究やiPS細胞の樹立など、医学・医療の分野に大きな変革をもたらす新しい研究が急速に進められています。

また、これらの研究にかかすことのできないツールや測定機器を開発・提供するバイオテクノロジー業界は、お客さまの研究開発テーマの絞り込みや価格選好に応えるべく、その競争はますます激しさを増しています。このような背景のもと、当社は大学や製薬企業などの研究機関に対し、基礎研究や創薬研究に有用な遺伝子破壊マウスと抗体、これらにかかわる製品・サービスを提供するとともに、保有する技術やシーズの導出(ライセンス)に向けた取り組みを積極的に進めてきました。

減収ながら売上総利益は改善、収益構造の転換が進む

近年、外部環境要因に左右されず安定的な成長を実現する収益体制を築くために、収益構造の転換を推進してまいりました。この結果、当期の売上高は324百万円となりました。

しかしながら、採算性を重視した受注に取り組んだことにより、売上総利益は前年同期比14百万円増の171百万円となりました。

損失は前年同期と比較し改善、 経常損益ベースで5期連続の赤字幅縮小を達成

また、研究開発体制を徹底的に効率化しコスト圧縮に努める一方、中長期的な事業基盤の拡大を見据え、有望な海外試薬メーカーとの独占的代理店契約や新たな抗体試薬の開発など成長への投資は積極的に行い、販売費及び一般管理費は前年同期比6百万円減の795百万円となりました。

これらの結果、営業損失は624百万円、経常損失は605百万円、当期純損失は634百万円と、いずれも前年同期と比較して改善しました。

抗体を用いたがん診断方法の確立をめざして

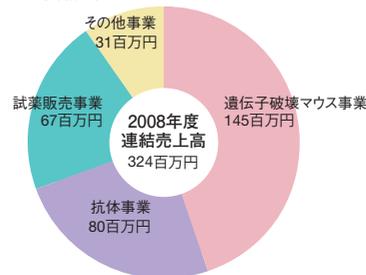
当社は様々な疾病を対象として、抗体を用いた新たな診断方法の研究開発を推進していますが、当期はこの取り組みにおいて進展がありました。7月には診断薬メーカーと尿サンプルによるがん診断に関するライセンス契約の締結を行い、診断薬の開発は次なるステージに移行しました。

また、国立がんセンターとの共同研究の成果である新規膀胱がんマーカーに対する抗体について10月には特許を出願しました。そして1月からは国立がんセンターとともに新規腫瘍マーカーの探索を開始しています。

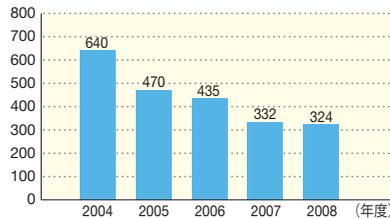
今後これらの取り組みを推進し、当社が開発した抗体を用いたがん診断方法の確立をめざします。

株主のみなさまには、今後ともより一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

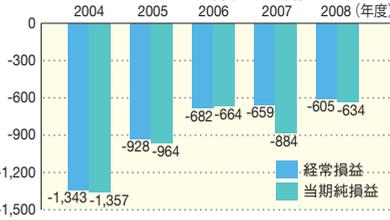
▼売上高構成



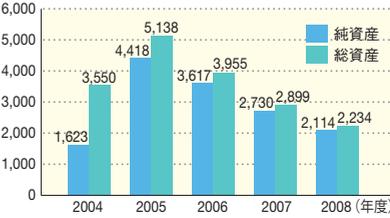
▼売上高(単位:百万円)



▼経常損益・当期純損益(単位:百万円)



▼純資産・総資産(単位:百万円)



連結貸借対照表

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 (2008年3月31日現在)	当連結会計年度 (2009年3月31日現在)
(資産の部)		
流動資産	2,216,972	1,513,240
固定資産	682,483	721,458
有形固定資産	361,764	338,483
無形固定資産	200,019	187,563
投資その他の資産	120,699	195,412
資産合計	2,899,456	2,234,699
(負債の部)		
流動負債	159,050	114,421
固定負債	9,586	5,351
負債合計	168,636	119,773
(純資産の部)		
株主資本	2,730,130	2,095,253
資本金	4,855,225	4,855,225
利益剰余金	△2,123,312	△2,758,189
自己株式	△1,782	△1,782
評価・換算差額等	△2,037	—
その他有価証券評価差額金	△2,037	—
新株予約権	—	17,387
少数株主持分	2,726	2,285
純資産合計	2,730,819	2,114,926
負債純資産合計	2,899,456	2,234,699

知的財産報告書2009 発刊のお知らせ

ステークホルダーのみなさまに、当社の知的財産に関する基本姿勢や取り組みについてご理解いただくことを目的として、知的財産報告書を作成しています。当社ホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

<http://www.transgenic.co.jp>

[トップページ](#) ▶ [IR情報](#) ▶ [IRライブラリー](#)

連結損益計算書

(単位:千円)

科目	前連結会計年度 (2007年4月1日から 2008年3月31日まで)	当連結会計年度 (2008年4月1日から 2009年3月31日まで)
売上高	332,848	324,865
売上原価	175,859	153,861
売上総利益	156,989	171,003
販売費及び一般管理費	801,526	795,181
営業損失	644,537	624,178
営業外収益	18,326	20,330
営業外費用	32,819	1,437
経常損失	659,030	605,285
特別利益	20,032	—
特別損失	238,728	25,627
税金等調整前当期純損失	877,726	630,912
法人税、住民税及び事業税	6,874	4,405
少数株主損失	137	440
当期純損失	884,462	634,877

連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:千円)

区分	前連結会計年度 (2007年4月1日から 2008年3月31日まで)	当連結会計年度 (2008年4月1日から 2009年3月31日まで)
営業活動によるキャッシュ・フロー	△534,951	△632,156
投資活動によるキャッシュ・フロー	273,577	514,995
財務活動によるキャッシュ・フロー	△214,000	—
現金及び現金同等物に係る換算差額	—	△1,129
現金及び現金同等物の増減額(減少:△)	△475,373	△118,291
現金及び現金同等物の期首残高	1,971,965	1,496,591
現金及び現金同等物の期末残高	1,496,591	1,378,300

■ 会社概要

2009年3月31日現在

会社名	株式会社トランスジェニック
設立	1998年4月
資本金	4,855百万円
従業員数	40名
事業所	
本社	熊本市南熊本三丁目14番3号
神戸研究所	神戸市中央区港島南町七丁目1番地14
東京オフィス	東京都中央区京橋三丁目9番2号

■ 株式の状況

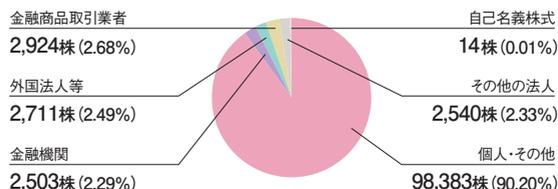
2009年3月31日現在

発行可能株式総数	436,301株
発行済株式の総数	109,075株
株主数	11,802名

大株主の状況

株主名	持株数(株)	議決権比率(%)
井出 剛	2,580	2.36%
野村證券株式会社	1,451	1.33%
日本生命保険相互会社	1,350	1.23%
村田 英造	1,202	1.10%
張本 進	1,146	1.05%
バンクオブニューヨーク・ジェシー・エム・クレイアント・アカウン ト・ジェイ・ピー・アール・ディア・アイ・エス・ジー・エフ・イー・エイ・シー	859	0.78%
上永 智臣	852	0.78%
佐賀 芳行	800	0.73%
クレディスイスインターナショナル	757	0.69%
中村 英幸	722	0.66%

所有者別株式分布状況



役員

2009年6月23日現在

代表取締役社長	山村 研一
取締役	福永 健司
取締役	能勢 博
取締役	井出 剛
常勤監査役	増岡 通夫
監査役	遠藤 了
監査役	佐藤 貴夫

株主メモ

証券コード	2342
上場市場	東京証券取引所 マザーズ
上場年月日	2002年12月10日
事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	毎年6月
基準日	定時株主総会・期末配当 毎年3月31日 中間配当 毎年9月30日
株主名簿管理人 特別口座の口座管理機関	三菱UFJ信託銀行株式会社
同連絡先	三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 〒137-8081 東京都江東区東砂七丁目10番11号 TEL:0120-232-7111(通話料無料)
公告方法	電子公告(当社ホームページに掲載) ※事故その他やむを得ない事由によって電子公告による 公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載 して行います。

IRからのお知らせ

当社の最新トピックスやホームページの更新情報などを電子メールでお知らせ
しています。ご登録は当社ホームページにて受け付けています。

<http://www.transgenic.co.jp/jp/ir/index.html>

当社のIR活動についてご意見・ご感想をお聴かせください。

下記アドレスへのご連絡をお待ちしております。

ir@transgenic.co.jp

